

# サイバー大学附属図書館の取り組み

藤田 礼子<sup>1</sup>

## 1. はじめに

サイバー大学（以下、本学）は、すべての授業をインターネットで受講できる4年制の通信制大学として、2007年4月に開学した株式会社立の大学である。福岡市の申請した構造改革特別区域法（特区法）の特例措置の適用を受け設置された本学は、図書館を含む校舎を福岡市に置いている（福岡キャンパス）。

入学から卒業まで一切通学が不要なため、本学の学生は日本のみならず海外に居住するものもいる。通学制の大学であれば、授業で通うキャンパス内に図書館があり、授業の空き時間などに訪れることが可能であるが、本学の場合は福岡キャンパスにある図書館に来館できるものは、福岡近郊に居住する一部の学生に限られる。

大学での教育・研究に図書館は必要不可欠である。本学のようなeラーニングを基本とするインターネット大学の図書館は、どのような役割を果たすことができるだろうか。

開学から10年を迎えるにあたり、本学附属図書館の開学時の計画と状況、そしてこの約10年間のさまざまな取り組みをまとめることで、今後の図書館のあり方、施策を考える第一歩にしたいと考える。

## 2. 附属図書館の概要

2016年4月時点のサイバー大学附属図書館の概要は以下の通りである。

所 在：福岡県福岡市 サイバー大学福岡キャンパス

面 積：202.99 m<sup>2</sup>

蔵書数：図書 18,330 冊（和書 13,766 冊、洋書 4,564 冊）、和雑誌 1,009 冊、視聴覚資料 286 点

電子資料：CiNii<sup>1)</sup>、日経 BP 記事検索サービス<sup>2)</sup>、Maruzen eBook Library<sup>3)</sup>、  
ジャパンナレッジ Lib<sup>4)</sup>

開 館：平日 10:00～17:00（土日、祝祭日、福岡キャンパス休館日は休館）

---

<sup>1</sup> サイバー大学 IT 総合学部・講師

### 3. 開学時の計画と開学初年度（2007年度）の状況

2007年4月に開学するにあたり、図書館については次の事項に関して整備計画が立てられていた。

- (1) 図書館の整備
- (2) オンライン検索システムの整備
- (3) 電子ジャーナルの導入
- (4) 他機関との提携

それぞれの計画の概要と開学初年度の状況は以下の通りであった<sup>5)</sup>。

#### (1) 図書館の整備

学生の居住地が多岐にわたる本学では、実際に図書館の利用は限られると想定し、IT総合学分野と世界遺産学分野に関する専門書を中心に10,000冊程度の図書を揃え、徐々に整備していくことを計画していた。実績としては、開学時に福岡キャンパス内に図書館(132.97㎡)を設置し、開学初年度末(2008年3月)時点で、寄贈されたものを中心に和書11,742冊、洋書1,509冊、合計13,251冊の図書が揃うこととなった。

また、本学の特性から、オンライン上での図書検索や資料入手についての支援を充実させる必要があることから、学習における補助的な役割を担う図書館職員を置き、図書館はその相談スペースとしての機能を果たすことを想定していた。開学初年度は福岡校舎で図書館管理を担う兼務職員を2名配置し、図書館機能の立ち上げと学生対応等を行った。

#### (2) オンライン検索システムの整備

インターネット上での図書館検索ページや、OPAC等の図書検索サイトへのリンクを充実させることで、学術情報をオンラインで検索できるシステムの構築が必要とされた。また、公共図書館や他の図書検索サイトとリンクし、効率的に検索できるポータル構築や、辞書・事典等の整備、リンク集の充実等、リファレンス環境の整備も必要とされた。

2007年4月の開学時点では体制は整わなかったものの、2007年10月には辞書・事典として、「ブリタニカ・オンライン・ジャパン」<sup>6)</sup>を導入し、年度末までにはWEB蔵書検索システムとして「Simple-OPAC」<sup>7)</sup>を導入した。

#### (3) 電子ジャーナルの導入

本学の特性からも、電子ジャーナルの導入は当初からの計画に盛り込まれていた。IT総合学分野、世界遺産学分野といったそれぞれの分野の学習に有用な電子ジャーナルの導入を計画していた。開学初年度の実績としては、2007年10月に国立情報学研究所(NII)の

提供する「CiNii」を導入した。

#### (4) 他機関との提携

本学附属図書館と大学等他機関の図書館をオンラインで接続したり、相互貸借、文献複写サービス等の実施を可能にしたりするための組織へ参加することや、個別に他機関との提携を確立し、相互利用ができる環境を整備することを計画していた。開学初年度においては特定の提携体制は取れていなかったものの、他大学への紹介状の発行等、他機関への協力依頼といった体制をまずは整えた。

以上のように、開学にあたり計画した事項に沿って、開学初年度である 2007 年度は図書館の整備を進めていった。しかしながら、日本全国、さらには海外に居住する学生に対して、図書館として十分なサービスが提供できているとは言えない状況であった。

そこで、2008 年度以降、図書館の機能を充実させるさまざまな施策に取り組んできた。一部の学生だけではなく、全学生が享受できるサービスを優先して導入することを目指して実施してきたさまざまな取り組みを、次にまとめる<sup>8)</sup>。

## 4. さまざまな取り組み

### 4.1. 蔵書収集および図書館の利用

#### 4.1.1. 蔵書収集

大学図書館の大きな役割の一つとして、大学での教育・研究に関わる学術情報を体系的に収集、蓄積、提供することがあげられる。そのため、まずは紙媒体としての図書を増やすことが一つの課題であった。

当初計画されていた 10,000 冊を越える図書を確保したが、寄贈図書を中心として収集した本学附属図書館の蔵書は、学部の教育内容に即した専門性の高い図書を多く揃えつつも、まだ十分であるとは言えない状況であった。そこで、計画的に蔵書を増やす施策として、以下の取り組みを実施した。

- ・授業で指定された教科書、参考資料の購入
- ・教員による推薦図書の購入

その結果、着実に蔵書は増加した(図1)。特に2012年度には、福岡キャンパス内の利用頻度の低いスペースを有効活用することで収蔵スペースを拡充し、IT総合学分野や理工学系分野に関する図書を重点的に増やす取り組みを行ったことにより、大きく蔵書が増加した。2015年度に蔵書が減少しているのは、世界遺産学分野に関する一部の図書を除却したことによる。図書の配架スペースにも限りがあることから、今後はIT総合学分野に関連する資料の拡充を目指す方針としている。

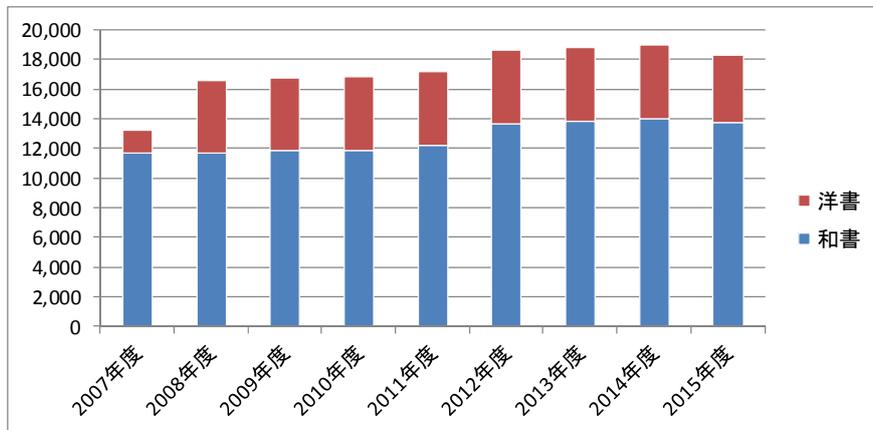


図1 蔵書（図書）の推移 [単位：冊数]<sup>9)</sup>

また、蔵書は増やすだけでは意味が無く、それらを学生に利用してもらうことが重要である。そこで、次のような取り組みも行っている。

- ・ 図書貸出サービス
- ・ 図書郵送貸出サービス
- ・ 図書貸出送料無料サービス
- ・ 図書複写サービスおよび複写物郵送サービス
- ・ 図書館利用ガイダンスの実施

本学の図書館に実際に来館できない学生向けに、2008年度より郵送での貸出サービスを開始した。本学図書館には外国考古学に関する貴重な洋書も所蔵されていたことから、この郵送サービスでの恩恵を受けた学生も多い。ただし、送料は利用者負担であったため、借りれば借りるほど学生の負担は増加する。そこで、2010年10月より、ある一定回数まで、送料無料で貸し出す「図書貸出送料無料サービス」を実施している。回数制限があるものの、借りたい学生には有用なサービスとなっている（図2、図3）。

また、費用は利用者負担ではあるが、所蔵する資料を複写して郵送するサービスも実施している。事前に複写希望の申請と代金の支払いを行い、後日複写物を郵送で受け取る方式だが、複写サービスの対象となり得る雑誌類の所蔵が少ないこともあり、利用実績は少ない。

また、図書館および実施しているサービスをより活用してもらうために、学生向けに『図書館利用ガイダンス』資料を作成し、オンラインでのガイダンスを実施している。

## サイバー大学附属図書館の取り組み

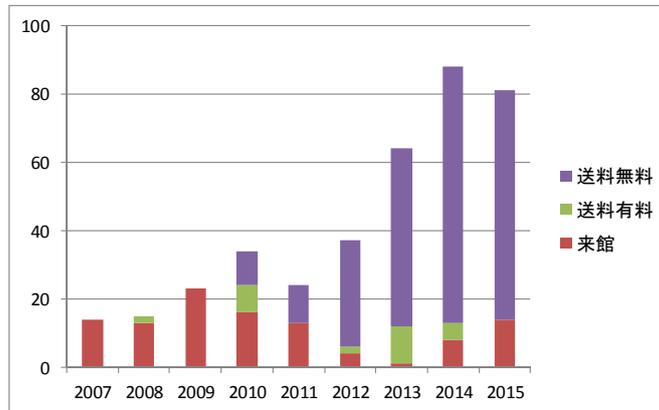


図2 図書貸出利用実績 [貸出人数：単位（人）]

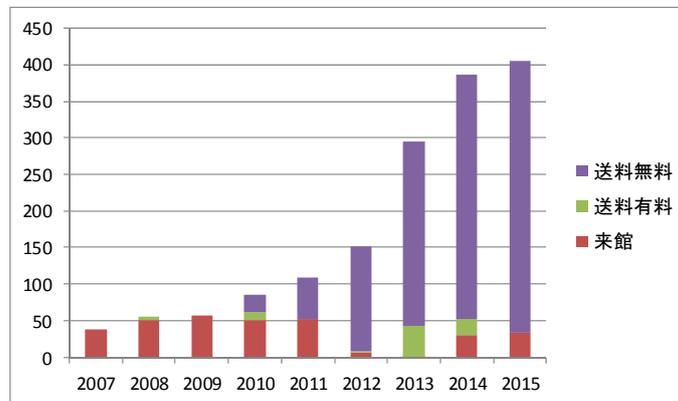


図3 図書貸出利用実績 [貸出冊数：単位（冊）]

### 4.1.2. 図書館の利用

通常図書館は、図書を借りるだけではなく、図書の閲覧、図書を利用した学習等にそのスペースが使用される。そのため本学でも、閲覧席として20席を用意している。

図4に、2008年度から2015年度までの図書館施設年間利用者数の推移を示す。「一般」の区分には、他大学の学生、本学の卒業生、近隣の一般住民の利用者を含む。また利用目的としては、図書館そのものを目的とした利用のみならず、福岡校舎で開催されるセミナー等への参加の際に図書館を利用したものも含む。

遠隔地に居住する学生が多いものの、大学行事や各種セミナー等を開催する際に来校する学生もいることから、図書館そのものを利用する学生を増やすことを目的として、いくつかの施策を実施した。

- ・ 休日（土曜日）開館
- ・ 平日夜間の開館

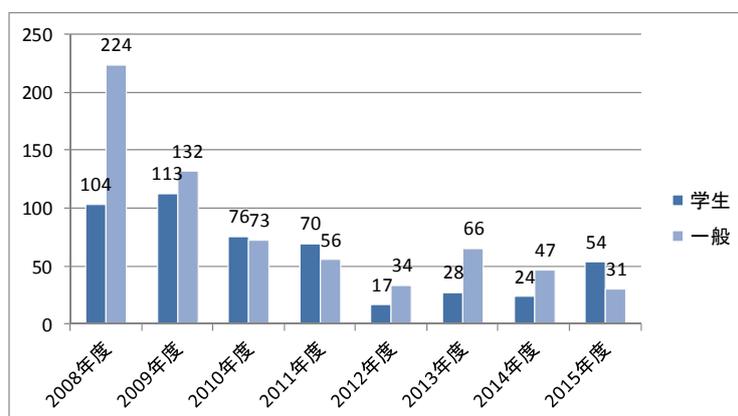


図4 図書館施設年間利用者数の推移 [単位：人]

2010年6月には、本来であれば休館の土曜日に図書館の開館を、また2010年8月には、社会人学生向けに平日夜間の図書館の開館を行ったが、残念ながら利用実績はゼロであった。図書館のある福岡キャンパス自体が福岡市の中心からは離れていることもあり、図書館への来館者を増やすことは難しいという結果となった。

なお、図書館のある福岡キャンパス周辺地域との交流も兼ねて、2007年度から図書館を地域住民に開放する取り組みも行っており、2016年度は、週3日（月・水・金）を開館日としている。原則「閲覧」のみであるが、毎年一定数の利用が見込まれるため、開学以来継続して実施している施策となっている。

#### 4.2. 電子資料サービス（電子ジャーナル・電子書籍等）の導入

本学の学生は、日本国内のみならず一部は海外に居住することから、こうした学生に向けたサービスとしては、電子ジャーナル・電子書籍等の電子資料サービスの導入が必要不可欠である。開学初年度に導入された「ブリタニカ・オンライン・ジャパン」と「CiNii」に加えて、2010年度以降いくつかのサービスを追加で導入した（表1）。

表1 これまでに導入した電子資料サービス

サービス名	導入開始	導入終了
ブリタニカ・オンライン・ジャパン	2007年10月	2016年3月
CiNii	2007年10月	※継続中
JSTOR	2010年4月	2015年3月
日経BP記事検索サービス	2011年4月	※継続中
Maruzen eBook Library	2015年10月	※継続中
ジャパンナレッジ Lib	2016年4月	※継続中

## サイバー大学附属図書館の取り組み

通学制の大学では、図書館に設置されたコンピュータを利用して電子ジャーナル等のサービスを利用することが多いと考えられるが、本学では、学生が授業を受けるときにログインする学習管理システム（Learning Management System: LMS）の附属図書館ページから電子資料サービスにアクセスする。

電子資料サービスへのアクセスには、「ID・パスワード認証」、「リファラ認証」、「固定IPアドレス認証」など、さまざまな認証方法が用いられる。電子資料サービスを導入する際は、そのサービスの提供会社と認証方法について調整が必要となるが、調整がつかず、導入を見送っているサービスもある。

また、これまでに導入・提供したサービスで、すでに利用を取りやめたものもある。開学初年度に導入した「ブリタニカ・オンライン・ジャパン」は、2016年3月をもって利用を停止した。それに代わるものとして、2016年4月からは「ジャパンナレッジ Lib」を新たに導入した。「ジャパンナレッジ Lib」には、検索対象としてより多くの事典・辞書・書籍・雑誌等が含まれていることにより、導入を決定した。

2010年4月に導入したJSTORは、主として世界遺産学部の学生の卒業研究向けに選定した電子ジャーナルである。2010年度春学期をもって、世界遺産学部の学生募集を停止し、その後順次世界遺産学部の専門科目、卒業研究科目が閉講して利用者が減少したことにより、2014年度末で利用を停止した（図5）。

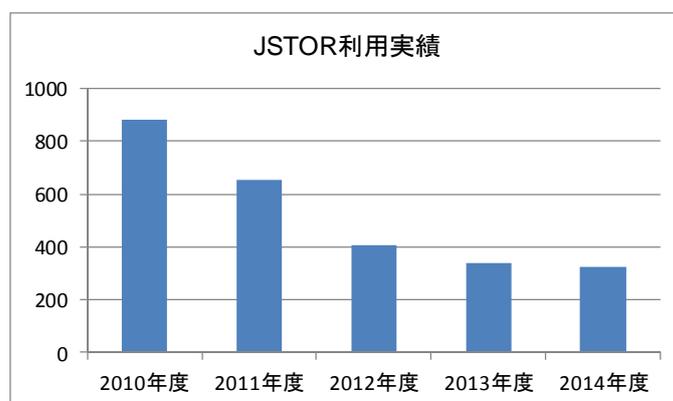


図5 JSTOR 利用実績

現在継続している電子資料サービスのうち、書籍が主体となる Maruzen eBook Library は、同時アクセス数が限られた契約であるものの、書籍によってはダウンロードして学生個々の環境で閲覧可能なことから、予算の範囲内で契約冊数を徐々に増やす方針としている。現時点で契約している書籍は、本学で開講している科目の教科書、参考図書、教員の推薦図書が主体となるため、学期開講時（4月、10月）の利用が多い。

### 4.3. 附属図書館 HP (学内向け)

実際に図書館に来館できない学生にとっては、学生がアクセスする学習支援システム (LMS) に設置された附属図書館ページが、本学の図書館に関するすべてのサービスの窓口となる。

サイバー大学の学習支援システム (LMS) は開学時に使用していたシステムを 2012 年 4 月より変更した。変更前の LMS では、図書館に関する情報は「リンク」情報としてまとめられていた (図 6 : 2010 年 5 月時点)。すでに導入していた「ブリタニカ・オンライン・ジャパン」、「CiNii (サイニイ)」、「サイバー大学図書館蔵書検索」、「図書関連リンク」という 4 つの項目でサービスが提供されていた<sup>10)</sup>。



図 6 変更前の LMS の「リンク」ページ

図 7 は、現在使用されている LMS 「Cloud Campus」にある附属図書館のトップページである。「Cloud Campus」では、独立した附属図書館のページを設置している。利用を促進する電子資料サービス等のバナーをトップに置き、その下に図書館からのお知らせや各種メニューを配置している。

バナーの中央には、「附属図書館蔵書検索 (OPAC)」への入口を設置している。本学の蔵書検索 (OPAC) としては、先に述べたように開学初年度に「Simple-OPAC」を導入したが、2015 年度により検索機能が向上した「Simple-OPAC プレミアム版」に変更した。

## サイバー大学附属図書館の取り組み



図7 LMS (Cloud Campus) の附属図書館トップページ

附属図書館ページは附属図書館で契約している各種電子資料サービスへの窓口であると同時に、広く図書、雑誌等に関するネット上の情報への出口でもある。そのため、インターネットでアクセスできる情報のなかで、大学での教育・研究に有用なものにたどり着けるように、図書関連リンク集を充実させている(図8)。



図8 図書関連リンク集

### 4.4. 学生ニーズの把握

本学はインターネット大学であるため、通常の通学制の大学図書館とは、学生から求め

られる役割が異なると考えられる。そこで、学生が図書館に期待するものを把握するために、学生アンケートを実施している（表2）。

表2 学生アンケートの実施状況

実施時期	有効回答数
2009年10月 <sup>11)</sup>	133人
2011年7～8月	97人
2012年7～8月	112人
2013年12月～2014年1月	313人

アンケートの実施にあたっては図書館が抱える課題に対して仮説を立て、それを検証する内容でアンケート項目を作成した。本稿ではアンケート結果の詳細は割愛するが、アンケートの実施により図書館の主たる利用者である在学生の総合的なニーズを把握し、次なる施策へとつなげるよう努めている。

#### 4.5. 他機関との提携

前述したように、本学附属図書館では、開学時から大学等他機関の図書館とオンラインで接続したり、相互貸借、文献複写サービス等を実施したりできる体制の整備を計画していた。しかし、学内の蔵書管理、貸出管理等について専用のシステムを備えていないことから、現時点では特定の提携システムに参加していない。その代わり、2012年度より私立大学図書館協会への加盟し、他大学図書館との情報交換や各種情報収集を行う中で、今後の他機関との提携の可能性を模索している。

#### 4.6. 図書館の運営体制と図書館職員のスキルアップ

開学時より、教務部（現在の学務部）に図書館担当を置き、図書館の整備に努めてきた。図書館に関する施策等の審議については、2007年度から2013年度までは図書委員会で、2014年度からは全学運営委員会で取り扱っている。

図書館の役割の一つとして、リファレンス業務がある。来館した学生から対面で相談を受けるだけでなく、本学の場合はメール等での相談も多い。そうした相談事項に対応できるように、職員のスキルアップも重要となっている。そこで、文化庁主催の図書館等職員著作権実務講習会や、国立国会図書館が開催する遠隔研修講座を受講するなど、図書館担当職員のスキルアップにも取り組んでいる。

#### 4. おわりに

2007年4月に開学して約10年、サイバー大学附属図書館ではさまざまな取り組みを実施してきた。利用者である学生のニーズを把握しつつ、インターネット大学の図書館としてあるべき姿を模索してきたが、検討すべき課題も多い。

世の中の動向として、電子ジャーナル・電子書籍の導入は必須の課題である。どのような分野のサービスを導入するべきか、また導入したサービスをいかに学生に利用してもらうかを検討しつつも、予算の関係やシステム面の問題で導入を見送らざるを得ない場合もある。電子ジャーナルの価格の高騰も大きな問題の一つである。それぞれの大学で独自に数多くのサービスを導入するのは困難な現状では、大学間の提携や協力体制を築くことにより、負担の少ないサービスの導入ができないかも検討していく必要がある。

本稿において、本学附属図書館でのこれまでの10年の取り組みの概要を振り返ったが、個別の施策や課題については、稿を改めて論じてみたいと考えている。

これから5年先、10年先、eラーニング大学における図書館は、どのような役割が求められるのであろうか。すべての授業をインターネットで受講できる大学だからこそその図書館のあるべき姿や、課題・施策を検討し、学生、教職員に対するサポート体制の充実を図りたいと考える。

#### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、これまでに図書館担当職員の方々が作成した資料を参照させていただきました。阿部弥生氏、米山あかね氏、井元祥子氏に御礼申し上げます。特に現在の担当である井元祥子氏は、年度ごとの実績の取りまとめ、翌年の運用計画策定および施策の実施において、多大なるご尽力をいただいています。本稿でも井元氏の作成された情報を使用させていただきました。重ねて感謝いたします。

#### 注および参考文献

- 1) 国立情報学研究所 (NII) が提供する、論文、図書、雑誌や博士論文などの学術情報を検索できるデータベース・サービス。<http://ci.nii.ac.jp/>
- 2) 日経 BP 社の雑誌記事データベースを検索できるサービス。  
<http://bizboard.nikkeibp.co.jp/about/daigaku/index.html>
- 3) 丸善雄松堂の機関向け電子書籍配信サービス。<https://elib.maruzen.co.jp/>
- 4) 約 50 種類の辞事典、叢書、雑誌が検索できる辞書・事典サイト。  
<http://japanknowledge.com/library/>
- 5) 開学時の整備計画および開学初年度の実績については、設置認可申請書および『サイバー大学平成 19 年度 自己点検・評価報告書』より抜粋した。

[http://www.cyber-u.ac.jp/about/pdf/self-check/h19\\_tenken\\_hyouka\\_2.pdf](http://www.cyber-u.ac.jp/about/pdf/self-check/h19_tenken_hyouka_2.pdf)

(2016年9月25日確認)

- 6) 日本語と英語の百科事典をもとに開発されたデータベース。  
<https://www.britannica.co.jp/online/bolj/>
- 7) 株式会社 OPAC が提供する WEB 蔵書検索サービス。 <http://koueki.net/>
- 8) 附属図書館におけるさまざまな取り組みについては、HP に公開された『自己点検・評価報告書』、『自己点検評価書』および、学内の会議体の資料に基づく。
- 9) 蔵書数については、2007～2009 年度末の実績は『自己点検・評価報告書』より、2010 年度以降は、学術情報基盤実態調査時にまとめた情報より抜粋した。
- 10) 変更前の LMS での学生の学習環境については、以下を参照のこと。  
藤田礼子「第4章 学生の学習環境」『eラーニング研究—サイバー大学のeラーニング教育システム—』第1号、2010年、pp. 37-54.
- 11) 2009年10月に、文部科学省高等教育局専門教育課により、「構造改革特区における規制の特例措置のあり方に関する評価のための調査【インターネット等のみを用いて授業を行う大学における校舎等施設に係る要件の弾力化による大学設置事業（832）関係】」が実施され、その一環で、大学図書館に関するアンケートが行われた。